

# 附属小・中学校と協同して行う実践と理論を有機的に関連付ける 英語科教育法カリキュラムの開発 － e-Portfolio を活用して－

山崎友子・James M. Hall\*, 芳門淳一・中野誉史・山崎健志\*\*,

高室敬・菅原純也・川村晃博\*\*\*

\*岩手大学教育学部, \*\*岩手大学教育学部附属中学校, \*\*\*岩手大学教育学部附属小学校

(平成27年3月6日受理)

## 1. はじめに

コミュニケーション能力の育成が小学校から高校までの英語教育を通して目指されている。学習指導要領では、小学校では「コミュニケーション能力の素地」を、中学校では「コミュニケーション能力の基礎」を、高校では「コミュニケーション能力」を育成することとしており、その指導方法として CLT (Communicative Language Teaching) を実践できる教員の養成が必要となっている。そこで、平成26年度学部 GP において、CLT の理論に対する認識と実践力の変化を、附属校との共同授業研究と e-Portfolio により質的に分析し、日本の英語教育環境に適用可能な CLT とその実践力について考察することと、その考察をもとに複数の教科教育法および校外実習を有機的に結びつけるカリキュラムを開発することに取り組んだ。本論では、開発した e-Portfolio の構成と主免教育実習前に設定した附属中学校でのグループ実習の分析を紹介し、英語教育法のプログラムを提案する。

## 2. E-Portfolio

現代は post-methodology の時代と言われ (Kumaravadivelu, 2009) 英語科教育法においては、既存の指導法を自分の置かれた環境に最も適切な指導法に修正する力を育成するべきとされている。学生に、理論を学び、実践し、課題を発見し、その解決を自ら図るというプロセスを提供し、課題解決の力を育成しなければならない。その道具として、e-Portfolio を用いることとした。

これは、岩手大学 ICT 事業により開発されたサイトに英語科教育法のコーナーを設け、そこに履修学生が実習の振り返り等指定された項目を記入して自分のページを作成し、成長を記録するポートフォリオとしていくものである。

### E-Portfolio とは

Strudler and Wetzel (2011) は、e-Portfolio の種類として、'objectivist' と 'subjectivist' の二つをあげている。前者は、学習者が自分の獲得した技能・知識を見せるためのものである。後者は、学習者が自分の考え・知識・技能がどのように進化したかを見せるためのものである。英語科が採り入れたポートフォリオは 'subjectivist' の性格を持つものである。つまり、ポートフォリオの目標は学習者が今まで、どのように成長してきたかを見せること。このポートフォリオを共有すれば、下の学年の学生は上級生が英語教師として成長していく様子を見ることが出来る。今後の授業、教育実習で直面する課題を乗り越えるのに、このポートフォリオが参考になると考えられる。

### E-Portfolio の構成

Richards (2012; 1998) の外国語教師力量論を参照し、岩手大学に合う英語科教育法に関する技能・知識・態度の目標を下記のように作成した。

- 1) Contextual knowledge for pedagogy (世界、地域、学校・生徒の知識) : 学校 (職員、生徒、環境)、地域、世界を視野に入れた知識。
- 2) Language Proficiency (英語力) : 流暢に、高い正確さで教室と様々な場面で英語の 4

技能を活用できる。

- 3) **Theories of Teaching** (英語教育方法論) : CLT 又は他の英語教育法理論を理解し、これを枠として自分の授業の分析ができる。
- 4) **Subject Matter Knowledge** (英語教育の専門知識) : 英語教育に関わる専門領域 (第2言語習得論, 社会言語学等) を枠として授業の分析をするための知識。
- 5) **Pedagogical Reasoning Skills** (授業戦略力) : ある特別な内容がある学習者に提供するための指導案作成, 教授時の問題発生予測力, 臨機応変に対応する能力。
- 6) **Teaching Skills** (教育力) : リーディング, リスニング, コミュニケーション, 文法等を焦点にする授業の枠を作り, それぞれに相応しい活動を考え実践する能力。
- 7) **Identity** (アイデンティティ) : 他の実習生, 教師と共同して授業の計画を立て, 自己を教育者として考える態度。

学生が, 上記のような態度・技能・知識がどう進行しているかを見極められるように, e-Portfolio に5つのページを設けた。対応関係は下記のとおりである。

- p.1 Front Page ⇒ アイデンティティ
- p.2 Critical Incidents (クリティカル・インシデント) ⇒ 全て
- p.3 Teaching Activities (英語学習活動の自作・自分の教育理論) ⇒ 英語教育方法論, 教育力
- p.4 Language and Culture (言語と文化) ⇒ 世界, 地域, 学校・生徒の知識, 外国語能力
- p.5 Disciplinary Knowledge (専門知識) ⇒ 英語教育の専門知識

学生には英語で記入することを求めている。また, 自己紹介には写真を添付するなど指示し, 「自分のポートフォリオ」という意識づけを図った。

### 3. 主免教育実習前のグループ教壇実習

理論の学習→実践→課題の発見→課題解決というプロセスの一つとして, 主免教育実習の前に, 附属中学校においてグループ教壇実習を設定した。

### 事前指導

実習に先立って, 附属中学校英語科教員から附属中学校の英語授業と CLT についての講義と附属中学校の実際の英語授業の観察を行った。この指導を通して学生が次の事項を学んだことがレポートと振り返りの授業から分かった。

- 1) できるだけ多くの英語を使用し, 日本語は少ない
- 2) バランスのとれた活動的な授業
- 3) 説明ではなく, デモンストレーションが用いられている
- 4) それぞれの生徒への配慮・励ましの言葉がかけられている
- 5) コミュニケーションの要素が多い
- 6) Sequencing of short activities and maximizing opportunities for practice

### グループ教壇実習

事前学習の後, 7月に中学2年生4学級においてグループで教壇実習を実施した。8名1グループとなり, 授業案を計画し教材を作成して臨んだ。単元は, 通常使用している教科書の LESSON 4 Enjoy Sushi “Get” Part1 とした。教員の他, 県派遣の現職の中学校英語教員である大学院生も見学した。

### 結果

E-Portfolio へ記載された振り返りの記述, 大学院生の観察から, 結果を振り返ってみる。

Teaching Activities のページには, 学生自らが考案した activities / tasks が記載されており, CLT の実践への一歩となっていた。同時に, 課題が自覚されており, 以下の7点にまとめることができた。

- 1) 指示を簡潔に! 英語ではっきりと! Activity が難しいからこそ, 詳細に! デモンストレーションの活用を。
- 2) Controlled Activity のバリエーション (生徒にとってあきやすい・退屈・簡単・説明が多い)
- 3) 講義になってしまい, 生徒がノートをこまめにとってしまった (showing な要素を入れる

べき)

- 4) 生徒の興味関心をひく Activity の研究・開発が必要
- 5) Practice の段階に止まり、コミュニケーションになっていない
- 6) 文法説明の多い授業となった
- 7) 生徒の反応が薄いため説明の繰り返しが見られた

事前指導の中で学んだ現場の教師の工夫や技術を実践の實踐にすぐ適用することが困難であることが分かる。

また、Critical Incidents を、同じ学生集団が昨年度後期に小学校で行った英語活動のグループ教壇実習と比較分析した結果（山崎他，2016），教師としての成長・探求の方向の程度に「後退」が見られた。先行研究（Griffin, 2003）に倣い、このカテゴリーでは、「具体的に思考する」「新米教師として注意深く思考する」「教育的視点から思考する」という3つのレベルを設定して分析したところ、学習者への視点が含まれている「教育的視点から思考する」が21名から13名に減少し、「新米教師として注意深く思考する」が6名から15名に増加した。（図1）

N-28

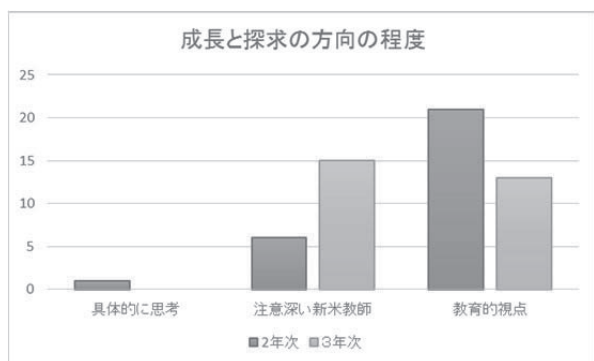


図1. 教師としての成長と探求の方向の程度の比較（2年次と3年次の教壇実習）

また、現職の中学校教員である大学院生は、次の点を課題として挙げた。

- 1) 黒板にプロジェクター用のスクリーンがかかっていて、板書が読めない生徒がいる
- 2) 準備不十分。紙板書に書き込むのにチョーク

を使っている

- 3) 生徒がまだ作業を終わっていないのに、次の課題に進んでいる。生徒の様子を見ようとしていない
- 4) 教師役の学生が手に持って示している写真が後の生徒には見えない

これらは、CLTの指導技術ではなく、生徒理解に基づく教育力一般に関わる課題であるという共通点がある。

### 考察

学生が示した課題は、教師としての成長が一直線ではないことを示している。長期的展望より短期的目標を重視する、学習者の学びより指導者の教え方に関心が向かうことは、一般に経験の浅い教師の示す特徴とされている（Lortie, 1975）。本学部の学生が抱えた課題も、この経験の浅い教師に見られがちな特徴と一致している。

「教育的視点から思考する」方向性をもった学生が減少したことは、2年次の実習が小学生を対象とした教壇実習であったことに対し、3年次では中学生を対象とするという新しい体験となり、かつ、英語科の授業という点も新たな課題となり、学習者への視線よりも指導する側である自分自身へ注意が向いたためと考えられる。また、大学院生が指摘した課題も、学習者の立場に立つと当たり前の「教育力」であるが、学生にとってはCLTという新しい教授法がまず優先する課題であったため、配慮不足となったものと考えられる。

学生の示した課題は「後退」を示しているのではなく、新たな課題を乗り越えるための復習のステップと考えられる。従って、教員養成のプログラムには、このような新しい課題とその咀嚼のための復習の過程がスパイラルに構成される必要がある。

## 4. 提案

附属校の協力のもと、理論と実践と省察をスパイラルに取り込んだ英語科教育法プログラムとして、次の構造を考え実践しているところである。

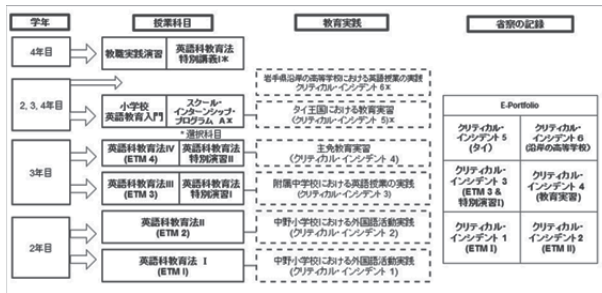


図2 再構成した英語科教育法プログラム  
(出典 岩手大学教育学部年報, 2016)

## 5. まとめ

「教室」や「学習者」は多様である。それぞれの置かれた環境で最大限有効な指導を実現するには、教員養成課程において、学生が課題を発見し、その解決を図る経験をし、成長のプロセスから学ぶことが重要である。幸い、附属校と積極的な協力体制を組み、プログラムを開発しながら、学生個々の成長を見ることができた。

本報告書は、中高教員免許のための実習を主に紹介したが、英語教育は小学校の英語活動とも連携した一貫性のある教育が求められている。附属小学校からも協力を得て、研修会に学生も参加し、授業を参観して学んでいる。また、「小学校の英語入門」においては、今年度は、その最終課題であった英語劇を、附属小学校で披露する機会が設けられた。教育実践の場である附属校と理論的裏づけをする大学との連携として、有意義なプロジェクトとなった。

## 引用文献

- 1) Griffin, M. L. (2003). Using Critical Incidents to Promote and Assess Reflective Thinking in Preservice Teacher. In *Reflective Practice*, Volume 2, pp. 207-220 (14).
- 2) Kumaravadivelu, B. (2009). *Understanding Language Teaching*. London: Routledge.
- 3) Lortie, D. C. (1975). *Schoolteacher* Second Edition. Chicago: University of Chicago Press.
- 4) Richards, J. C. (2012). Competence and

Performance in Language Teaching. In A. Burns & J. C. Richards (Eds.), *Pedagogy and Practice in Second Language Teaching*, pp. 46-56. New York: Cambridge University Press.

- 5) Richards, J. C., Li, B., & Tang, A. (1998). Exploring pedagogical reasoning skills. In J. C. Richards (Ed.), *Beyond Training*, pp. 86-102. Cambridge: Cambridge University Press.
- 6) Strudler, N., & Wetzel, K. (2011). Electronic Portfolios in Teacher Education: Forging a Middle Ground. *Journal of Research on Technology in Education*, 44(2), 161-173.
- 7) 山崎, Hall, 芳門, 高橋, Fekete. (2016). 「コミュニケーション能力育成のための英語科教育法カリキュラムの再構成 —Critical Incident・実習校との連携・E-Portfolioをもとに—」『岩手大学教育学部研究年報』第79巻, 69-78.